

## Trio Accord ——

白井 圭 (ヴァイオリン)、門脇大樹 (チェロ)、津田裕也 (ピアノ)

### 曲目解説

#### ドヴォルザーク:ピアノ三重奏曲 第1番

結婚(1873)、プラハ聖ヴォイチェフ教会オルガニスト就任(1874)、歌劇《王様と炭焼き》初演の成功(同)、オーストリア政府の奨学金獲得(1875)など、本曲が書かれた1875年に至る数年は、ドヴォルザークが人生の成功をつかんだ時期だった。

アレグロ・モルトの第1楽章はソナタ形式。類い稀なメロディメーカーであるドヴォルザークは、3つのテーマを組み合わせて、巧みな転調とともに活気ある音楽を構築している。哀感漂うアダージョ楽章は全曲の白眉。ト短調とイ長調の2つのテーマがカノン風の進行で情感を昂める。第3楽章は、限りなくポルカのスタイルに近いスケルツァンド。終楽章もソナタ形式で、第1楽章と同様に3つの主題が展開する。最初のト短調の主題は暗い情熱を帯びているが、勝利の解放が約束されたコーダに向かって、様々に表情を変えながら颯爽と駆け抜けていく。

#### マルティヌー:ピアノ三重奏曲 第2番

ナチスの手を逃れてパリからアメリカ合衆国に移住していた時代(1941-53)に書かれた作品で、作曲家の不安を色濃く反映している。ヴァイオリンから音楽の道へ入ったマルティヌーらしく、スピッカートやダブルストップへの偏愛などは本作でも健在。

アレグロの第1楽章は、ヴァイオリンの孤独な歌で開始される。この密やかな歌と、音をどンドン断ち切っていく焦燥感に満ちた主題が対立しながら展開する。もっとも長い第2楽章は、ポツポツと鳴るピアノの分散和音によって、動きの少ない讚美歌のような調べをヴァイオリンが奏でる。徐々に旋律は憂鬱さを帯びていくが、ヴァイオリンにぴったりと寄り添うようにチェロが歌い始めると、次第に音楽は高揚していく。背景で打ち鳴らされるピアノの和音も効果的。長大な詠嘆の音楽は、両者がひっそりと悲歌を奏でて終わる。アレグロ終楽章は、導入に続いてピアノが奏でる行進曲風のテーマと、堂々と威厳をもった主題が絡み合う。まるでショスタコーヴィチとブラームスが同舟したかのような風情で、三者の急速なパッセージのユニゾンが熱狂的に曲を結ぶ。

## ドヴォルザーク:ピアノ三重奏曲 第4番《ドゥムキー》

50歳を迎えたドヴォルザークが、最後の(4番目となる)ピアノ三重奏曲を完成させたのは1891年。いわゆる大作のほとんどを発表し、残すところは、「新世界」交響曲、チェロ協奏曲、アメリカ弦楽四重奏曲という北米がらみの人気作と、《悪魔とカーチャ》および《ルサルカ》の二大歌劇のみである。

《ドゥムキー》の愛称で知られる本作にシリアスな絶対音楽を求めるのはお門違いと言えよう。6つの楽章は、それぞれが独立した楽想を持っており、ソナタ形式を採用したものは一つもない。かといって、標題があるわけでもなく、速度記号が記されているのみ。「ドゥムキー」とは、ウクライナ発祥の歌謡バラッド「ドゥムカ」の複数形と説明されるのが通例で、その意味で本曲は「6つのドゥムカ」とも言える。だが「duma」という言葉の意味から、単純に「思い」や「瞑想」という意図もあるのではないかという説もある。なお、チェロの活躍(例えば、4曲目の民謡風の悲歌など)が印象的な本曲は、チェロ協奏曲を献呈されたことで知られるチェリストのハヌシュ・ヴィハンを念頭に書かれたことも付け加えておこう。